

第 62 回弘明寺サロン報告

サロン担当 高橋照夫（記）

開催日 2018 年 9 月 8 日
場 所 神奈川学習センター第 4 講義室
演 目 藤原銀次郎伝 ―その思想形成と王子製紙の経営―
講 師 植地 勢作氏（神奈川同窓会理事）

弘明寺サロンは今回で 62 回と回を重ねておりますが、植地氏は過去 5 回、講師としてお迎えしております。今回は放送大学の卒業研究論文で現在、渋沢榮一記念財団の『青淵』に掲載中（すでに 17 回を終了であと 1 回）の藤原銀次郎の評伝について講演をいただきました。

藤原銀次郎は 90 年の生涯の中で多方面にわたり幾多の功績を残しており、社会一般では実業家、政治家といわれております。

植地氏は演目のサブタイトルを「その思想形成と王子製紙の経営」とされておりますが、今回の講演ではその生涯をほぼ 5 期に分けて述べられました。

それらの中で興味をそそられたものを挙げてみます。

① 慶応義塾からジャーナリストへ（レジュメの 1～3 章）

銀次郎は 1890 年に松江日報社（現山陰中央新報社）に満 20 歳で主筆として入社、1895 年から社長、主筆を 5 年間兼務しました。山陰の地方紙ではありますがその異才ぶりには驚かされました。

② 王子製紙の経営時代（4 章）

三井銀行を経て、富岡製糸所支配人の後、1911 年王子製紙に入社、初代王子製紙社長として、以後 30 年にわたり経営に当たり、「日本の製紙王」と称されました。

銀次郎の名言録として「熟慮断行」「一人一業主義」が有名ですが、植地氏は銀次郎の経営センスを、現業主義としての立ち位置を評価するとともに「熟慮断行」の前には徹底した事前調査があったと考察されておりました。

③ 藤原工業大学の設立（5 章）

銀次郎は母校慶應義塾のために工業大学の設立に尽力し、私財 800 万円（現在では 140 億円）を投入しました。この藤原工業大学は現在の慶應義塾の工学部の前身に当たります。銀次郎はこの後政治の世界に転進しますが、この転進がなければ、我が国の教育分野にも大きな足跡を残したのではないかと思います。

④ 国政に参画（6 章）

銀次郎は平民ではありませんでしたが勅撰の貴族院議員でした。それゆえでしょうか 1940 年以降米内内閣（商工大臣）、東條内閣（国務大臣）、小磯内閣（軍需大臣）と軍事政権の幕閣に名を連ね、国策の推進に貢献してゆきますが、当然のことながら終戦で A 級戦犯として 1945 年から 6 年間公職追放となります。

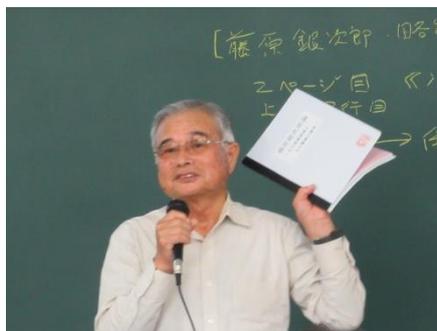
王子製紙時代で磨かれた経営手法で祖国の国体保持に全霊をかたむけた滅私奉公の結果でしょうか。

銀次郎にとってはまさに雌伏の6年でしたが、新生日本が復興に向けて立ち上がろうという時期に参画できなかったことは無念であったろうと推測いたしました。

⑤ 国際親善活動と科学財団の設立（7，8章）

三井物産時代に縁のあったスウェーデンから製紙生産設備を導入したことを機縁に日瑞協会（銀次郎は会頭を務めた）を通して両国の親善に尽力しました。スウェーデンに送られた茶室「瑞暉亭」その象徴です。

一方で1959年に藤原科学財団を設立し、藤原賞を設け、後進の科学者の顕彰を行いました。



植地氏の講演で、銀次郎の全生涯の活躍は幅広い分野に渡っており、スケールの大きいダイナミックな人生であったことがよく理解できました。なお、今回の講演のレジюме（29シート、8ページ）は同窓会のホームページに掲載されておりますので、併せてご参照いただければ幸いです。

